

巡りくる夏に

多田龍介

◆ 目次

巡りくる夏に	6
新聞紙	8
うしししし	10
終活メモ	12
老いらくは甘し	14
匿名掲示板にて	16
嘲笑	18
ニートの誕生	20
荒らしにコフ	22
故郷今昔	24

国破れて

26

生きられたし

27

ノーブルドレス

28

無慈悲様

30

Youは何しに病院へ？

32

ある懸念

34

so so

36

目方の味方

38

悪魔に餌を

39

空梅雨に思うこと

40

あとがき

42



巡りくる夏に

人生は自分との戦いだ
誰のせいにもできない戦だ
と

アスリートが言うならいいだろう
政治家が言えば眉唾物だが

火の玉になってやるといふ

君のは火だるま

燃えろ、火の玉

橙橙

大爆発……て、やめてください

萌えて萌えて
春が芽吹いているのねえ
もう夏だった
暑い、暑すぎる
つい愛しちゃう

新聞紙

大学の先生が言っていました
必死に追いかけたんですけどって

彼の消息を教えてやっても
よかったのではないですか

なんて言って教えるんだよ
不穏な言葉しか出てこないか？

また、また、情報の取り方にも
いささか不正があり

詫びるのは己らということにも
なりかねず

そしてこの種の話にうんざりした
よって不記載

しかし野辺に花の咲く
宮廷雀のさえずりが

うしししし

詩を恥ずかしいと見る向きがある
リア充には

リア王ならそうは言わんだろうが
まあいいだろう

僕には詩しかなかった

こんなに恥ずかしい人生になった以上

変態といつてなんだというのか

愛し合う夫婦のほうがよほど変態だ

TPOですよ

カラオケで歌えばいいが、路上なら御用だ

情動をバカにしてはいかん

詩情がそれを汲めるなら詩は良い

と、情動に直入できない言葉を綴る

僕の詩作が言ってみる

終活メモ

死に方について考える
病院にいて面会もようせず
天井を見つめたまま死ぬ
どんな気持ちなんだろうと
怨念がおんねん

皆、あたりまえに
そういう死に方をしている
死ぬときは
畳の上で死にたいねえ
家にはもう和室がなかった

入院に際しては

君の意志が大事なのだ

君の医師じゃないぞ

入ったらもう

ナスがママ、キュウリがパパ

老いらくは甘し

買ってすぐレトロゲーム機壊れてて振り返ってはならぬのだ。

過ぎ去った思い出ばかり美しく持ち越せるのはそれだけなのだ

振り返るほども記憶のない者にそんな生き方強いてはならぬ

思い出せ当時は不満たらたらでそれがどうして懐かしいのか

今、甘い。甘々に甘、糖尿病にする勢いで甘やかしたもう



匿名掲示板にて

たくさんさんの名無しさんの書き込みが
愛おしいのは

あのどれか一つに

僕がいるから

いないほうがよかったんじゃないかな？

後悔のないようにねと

書かれて

後悔だらけのバ〇アは違うなと荒らし

我が意を得たり

そんなこともあるものかとぞ

僕らが遊んでいる間に

なんと多くの生き死にが

はしゃぐ君を見て

微笑ましい

あとは社畜に任せろ（ビシッ）

嘲笑

持つ者に持たざる者の苦しみは、伝えられぬと感じ入る夜

持つ者の苦しみもまたわからぬと、持たざる者に伝えたき朝

何せその言葉が単に汚くて、いやですわねえ奥様と言う

有り余る攻撃性を持て余す。それなら数発抜いてきたまえ

人をバカ呼ばわりできる何ほどか君が持っているのかと問う



ニートの誕生

春には桜を見て

夏にはアイスをかじり

秋には紅葉を見て

冬はこたつで丸くなる

その間、その間

暫時体は痛い

それだけ？

それだけ

猫生ここに尽きる



荒らしにコフ

小市民的な幸せもいいけれど
雑魚の醜さも忘れないでください

一般人は無罪ではないと
僕、思うわけです

あれをして一般人と言われてしまうと
多く苦情が出る

冤罪^{えんざい}だ、やめてくれと
そうでしょう、そうでしょう

彼らとて誹謗中傷の書き込みをして
幸せになろうはずもなく

不幸だから書くんじゃないかな
オウ、ピティ、哀れな

故郷今昔

歳を取るにつれ

面の皮が厚くなります

競争の場面を

選べるようになりました

思えば若いころは

要らぬところに労をかけ

痩せること、眉を整えること

わりとどうでもいいこと

しょうがないよ

モデルさんなんだから

モデルさんが廃と化した

ものみな廃と化すであろう

こうして国は

衰退したのでありました

国破れて

信がない真がない義がない
勇気がない愛がない
代わりに

せこいこすい汚い小賢しい

あるのは

うらみつらみねたみそねみ

滅びるのに十分案件です

生きられたし

生まれてき交わっていき死ぬだけの無意味に意味を与えるは人

異人さん、何しに來たのこの国へ。おまえを笑いに來たんだろうか

沈みゆく国の行く末、見届けよう。ここは東の不思議の国かな

異国の地、異国の空に弾の降る。僕らの死はまだ理性の内だ

ヤンキーの世界は命が軽すぎる。死んではいかに生きてこそ花

ノーブルドレス

ノーブルなおば様の厭らしさというのはあるよ

というのは、このご時世に澄ましてられるとしたら

何か間違った理由によるものと考えざるを得ないからだ

実際、他の誰が災難に落ちようと

澄ました顔をしている

理性の内で生きられる者を

高みのインテリの説教を

快く思わない者もいる

で、理性の枠の外ですか

それもちよつとだが
気持ちはわかる

無慈悲様

しほうに勝たせてみたい今回は。君が黙るか見るためにとぞ

よかったね、よかったですね、よかったね。何がいいわけあるかいや見ろ

やめなさい、火傷^{やけど}だけでは済まないよ。次回無傷で出てくるアニメ



Youは何しに病院へ？

自転車で病院に向かう

夏の晴れた日

線路沿いの道を走り

陽射しはたおやか

いや、体力を温存したい

ここはバスと電車を乗り継いで行こう

暑いんですよ？

母に留守を任せるが

任せればいいんですよ

数時間も身の周りの世話をできないで

どうやって生きられるというんですか

粗相でもありやいい

もう僕に足向けて眠れないね、君い

きつとわかつてくれるはずですよ

僕の重要さを

わかってない風だから言っているよ

しかしまあ

息抜きでもするつもりで

通院日

の後

痛飲日

ある懸念

いいんだよ

金の力で女を抱くというのはね

ぐえへへ

おまえが好きな女をおでは抱いてるんだあ

おでの勝ちだあ

というような政治家がいたかもしれない

僕がいいねをするのも

考えものですな

または

創作物の読みすぎかもしれない

so so

考えてみてください

他人の詩とか

まず読まない

じゃ、僕の詩も読まれませんか

そうですね

そんなことないよ

僕、他人の詩、読みまくってるよ

目が滑っているが

唯我独尊の宇宙

両雄並び立たず

噛み過ぎを加味して☆一つ
心意気を汲んで☆二つ＋
概して☆三つです

目方の味方

人ひとりの命は地球より重いというのは
だいぶ重いね、重すぎだろう

人命を鴻毛こうもうの軽きにしてというのは
だいぶ軽いね、軽すぎだろう

せめて、体重分くらいは
目方増やしていきましよう

悪魔に餌を

俗物がうっとおしいのはデフォルトです
こちらが弱ればさらにそうなる

どうも私の生きざまが

広く一般の価値を攻撃した気もし、キモ死

蚤のようなジャ○プが嫌いです

空梅雨に思ふこと

順風のときは

人は他人に

メソッドを語りたがる

渦中の僕には

いいお世話である

体力の衰えなら

プライドが折れることはない

というか

初手から

折れてましてん

失ったものは

戻りません

それが命の

重みです

方便も使わずに、
夏

あとがき

この詩集は二〇二四年四月から七月にかけてネットに投稿したものをまとめた。自由詩を基調に短歌、五行歌とが少し混じって二十編からなる小冊子だ。

プライベートなことは直接書かないが、どうもこの間、不遇だった。というわけで詩も不満を爆発とまではいかないが、ガス漏れのごとく出てしまっている気もする。もちろんそれは世間に向かうのだが。言うなかれ、八つ当たりと。現代社会に不満の種は尽きまじ、よつて墮落の口実も尽きまじ。というほど醜えんきまじくくなっていなければいいが、と願う次第である。

詩にして婉曲えんきまじくにでも表現できたら、少しは胸も空いているのかもしれない。惰性で書きたくないという詩人もおられるかもしれないが、僕はそんな感じでも書いている。「口から洩れるどんな言葉も詩さ」という具合に。

それでは、読んでくださってありがとう。

二〇二四年七月二十八日

多田龍介

巡りくる夏に



著者	発行者	発行所
多田 龍介	多田 龍介	明水工房

令和六年八月一日
初版発行

©Ryusuke TADA 2024

